

■ ミヨー／バレエ音楽《屋根の上の牝牛》Op.58

《屋根の上の牝牛》とは、じつに奇想天外なタイトルである。それもそのはず。名づけ親は当代一流のダダイストとして知られていたジャン・コクトーだったのだから。パントマイム風の変革したバレエとして初演されたこの作品を、ミヨーは当初、チャップリン風の喜劇映画の音楽に使おうと考えていた。ところが、コクトーはほとんど即興的に喜劇仕立てのバレエの台本を作ってしまったのである。ミヨーもオーケストレーションを完成。禁酒法時代のアメリカの酒場を舞台としたナンセンスなバレエは道化師を含む出演者の動きと数々の舞曲を組み合わせた音楽で強調され、ちょっとしたスキャンダルになった。サティの精神を受けつぎ、ダダイストと面白おかしい舞台に興じたミヨーの姿が目につかぶ。

曲の構成は冒頭のヴァイオリンの主題を13回、変奏しながら繰り返す間に、多彩な要素を挟みこんでいく自由なロンド形式。主な特徴は一風かわった転調と、様々な民族音楽の混在である。転調は長調と短調の間を行ったりきたりしながら、全曲を通してすべての調が網羅されるよう作られている。こうした緻密な設計を持ちながらも、理屈っぽい堅苦しさはない。というのも、大衆的に親しまれている民族音楽が続いていくからだ。ブラジル民謡、タンゴやサンバ、哀愁を帯びたファドと、自由気ままに各国の音楽を渉猟していく。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。